

中学 2 年生

国語

6 月 2 2 日

オンライン授業の際に準備するもの

このプリント, ノート (または裏紙), 筆記用具

名前 _____

一 言語について、次の問いに答えなさい。

問一 次の傍線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。(送り仮名が必要な場合は送り仮名も書くこと。)

- ① 寺の境内を歩く。
- ② 虚偽の情報を流す。
- ③ 貯金が増える。
- ④ 海で魚をトル。
- ⑤ ダトウな意見を述べる。
- ⑥ 作品のミリョクを伝える。
- ⑦ レンカな品を選ぶ。
- ⑧ 姿がノウリに浮かぶ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲(a)のほそくたなびきたる。

夏は夜。A、闇もなほ、螢(b)の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降る

もをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端B、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、Cまいて雁な

どのつらねたるが、いと小さく見ゆるは①いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた②言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにあらず、霜(c)のいと白きも、またさらでもいと寒きに、③火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶(d)の火も白き灰がちになりてわろし。(第一段)

問一 空欄A～Cにあてはまる語をすべてひらがなで答えなさい。ただし、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに直して書くこと。

問二 二重傍線部(a)～(d)の「の」のうち、意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「いとをかし」、②「言ふべきにあらず」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問四 傍線部③「火などいそぎおこして、炭もて渡る」情景を作者はどのように感じましたか。二十五字以内で答えなさい。

問五 この作品と同じ時代に成立した作品を次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 「源氏物語」 イ 「徒然草」 ウ 「竹取物語」 エ 「万葉集」 オ 「方丈記」

問六 この作品の題名と作者名をそれぞれ漢字で答えなさい。

三 次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

見えないだけ 牟礼慶子

①空の上には

②もっと青い空が浮かんでいる

③波の底には

④もっと大きな海が眠っている

⑤胸の奥で

⑥ことがはぐくんでいる優しい世界

⑦次の垣根で

⑧書をさし出している美しい季節

⑨少し遠くで

⑩待ちかねている新しい友だち

⑪あんなに確かに在るものが

⑫まだここからは見えないだけ

問一 この詩で使われている表現技法を次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法 イ 体言止め ウ 反復法 エ 擬人法 オ 対句法 カ 擬態語

問二 八行目「蕾」がたとえているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在 イ 困難 ウ 未熟 エ 展望

問三 十二行目に込められた作者の思いを「未知」という語を用いて四十字以内で答えなさい。

問四 この詩の形式を漢字五字で答えなさい。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

僕のおじさんは「ぐうちゃん」という。津田由起夫三十八歳。いそうろう。

僕の母親の弟だ。いつも母に怒られている。学生の頃に外国のいろんな所を旅していたらしく、気づいたときには僕の家に住み着いていた。そして、長いこと「ぐうたら」しているから、いつのまにか「ぐうちゃん」というあだ名になってしまった。でも、ぐうちゃんは変わった人で、そう言われるとなんだかうれしそうだ。それを見て僕の母はまた怒る。怒るけど「これ、ぐうちゃんの好物。」なんて言いながら、ご飯の支度をしているから母もちょっと変わっている。

僕の家は東京の西の郊外にあって、父の祖父が建てた。古い家だけれど、ぐうちゃんが「いそうろう」できる六畳間があって、そこでぐうちゃんは「ぐうたら」している。父は単身赴任で仙台にいて、週末に帰ってくる。ぐうちゃんがいると何か力仕事が必要になったときに安心だから、と言って、父はぐうちゃんのいそうろうを歓迎しているみたいだ。

ぐうちゃんは、家にいるときはたいがい本を読んでいるか、唯一のタカラモノであるカメラの掃除、点検などをしている。全く「ぐうたら」ばかりでもなくて、たまに一週間ぐらい留守にするときもある。ぐうちゃんにきくと、そんなときは、全国を回って測量の仕事をしているという。一度、家を持って帰った測量の道具を見せてもらったけれど、すごく精密な望遠鏡という感じだった。レンズの中をのぞくと中にいっぱい目盛りが付いていて、ダイヤルでピントを合わせる。いかにもプロの人の道具みたいで格好いい。かといって、ぐうちゃんは、測量の専門家でもないらしい。僕の母は、ぐうちゃんのそういう落ち着いた仕事のかたが気に入らないようだ。「ちゃんと就職して早く独立しなさい。そうして『いそうろう』から卒業しなさい。」といつも怒る。

当のぐうちゃんは、母に怒られても、「でもまあもう少し。」などと訳のわからないことを言う。すると、母は今度は僕に向かって、「ぐうちゃんみたいな大人になってはダメだからね。」と言う。本当に文句ばかりだ。

①そんな「ぐうちゃん」だけれど、僕はぐうちゃんが大好きだ。ぐうちゃんの話は文句なしにおもしろいのだ。母は、「みんなほら話なんだからそんなのを聞いている暇があったら勉強していなさい。」と言うけれど、宿題をするよりよっぽどおもしろい。だから、僕がぐうちゃんの話の聞くとときはたいていぐうちゃんの部屋に行く。

……中略……

翌日、学校に行く途中で、同じクラスの吉井と今村に会った。初めはどうしようかと思ったけど、馬も飲んでしまうでっかいアナコンダや、三メートルもあるナマズの話はおもしろかったし、氷の惑星の話も、本当だったらきれいだろうなと思ったから、つい吉井や今村にその話をしてしまった。二人は僕の話が終わると顔を見合わせて、「ありえねえ。」「証拠見せろよ。」と言った。「そんなほら話、小学生でも信じないぞ。」そう言われればそう

だ。だから、部活が終わって大急ぎで家に帰ると、僕は真つ先にぐうちゃんの部屋に行つて、「昨日の話、本当なら証拠の写真を見せろよ。」と無愛想に言った。ぐうちゃんは少し考えるしぐさをして、「そうだなあ。」と言って、目をパチパチさせている。

「これまで撮ってきた写真をそろそろちゃんと整理して紙焼きにしないと、と思つてゐるんだ。そうしたらいろいろ見せてあげるよ。」むつとした。そんな②言い逃れをするぐうちゃんが好きではない。なんかぐうちゃんに僕の人生が全面的にからかわれた感じた。吉井や今村に話をした分だけ損をした。いや失敗した。僕までほら吹きになつてしまつたのだ。

それから夏休みになつてすぐ、ぐうちゃんはいつとも少し長い仕事に出た。関東地方の各地の川の測量をするということだった。僕は人生を全面的にからかわれて以来、あまりぐうちゃんの部屋に行かなくなつていたから、Iにも留めなかつた。

夏休みも終わり近く、いつものように週末に帰つてきた父と母が話しているのが、風呂場にいる僕の耳にも入つてきた。

「僕たちは、都市のビルの中にいるからなかなか気がつかないけど、由起夫君は若い頃に世界のあちこちへ行つていたから、日本の中にいたら気がつかないことがいっぱい見えてゐるんだろね。なんだか羨ましいような気がするな。」

母は、珍しくビールでも飲んだらしく、③いつもよりもつと強烈に雄弁になつてゐる。

「あなたは何をのんきなことを言つてゐるの。由起夫が、いつまでもああやって気ままな暮らしをしているのを見てゐると、悠太に悪い影響が出ないか心配でしかたがないのよ。例えば極端な話、大人になつても毎日働かなくてもいいんだ、なんて思つて勉強の意欲をなくしていったとしたら、どう責任取ってくれるのかしら。」

父が何かを答えているようだったが、はっきりとは聞こえなかつた。ただ、僕のことぐうちゃんが責められるのは少し違う気がする。そう思うと、電気の消えたぐうちゃんの部屋が急に寂しく感じられてきた。

それから、ぐうちゃんがまた僕の家に帰つてきたのは、九月の新学期が始まつてしばらくした頃だった。顔と手足が真つ黒になつていて、パンツ一つになると、どうしても笑いたくなつて困つた。

残暑が厳しい日だった。久しぶりにぐうちゃんのほら話を聞きたいと思つた。またからかわれてもいい。暑いから、今度は寒い国の話が聞きたい感じだ。

ところが、ぐうちゃんの話は、でっかい動物のでも、暑い国の話でもなかつた。

「旅費がたまつたから、これからまた外国をふらふらしてくるよ。」

ぐうちゃんは突然そう言った。「でもまあもう少し。」にはこんな意味があつたのか。ぐうちゃんはいつとも変わらずに話を続けている。それなのに、ぐうちゃんの声はどんどん遠くなつていく。気がつくつと、僕は④ぶっきらぼうに言つていた。

「勝手に行けばいいじゃないか。」

ぐうちゃんは、そのときちよつと驚いた表情をした。何かを話しかけようとするぐうちゃんを残して僕は部屋を出た。

それ以来、僕は二度とぐうちゃんの部屋には行かなかった。母は、そんな僕たちに、あきれたり慌てたりしていたけれど、父は何も言わなかった。十月の初めに、ぐうちゃんは小さな旅支度をして「いそうろう」を卒業してしまった。

出発の日、僕は、何て言っているのかわからないままぐうちゃんの前に立っていた。ぐうちゃんは僕に近づき、あの表情で笑った。そして、何も言わずに僕の手を握りしめ、力の籠もった強い握手をして、大股で僕の家を出ていった。

「⑤ほらばっかりだったじゃないか。」

「いそうろう」がいなくなってしまうた部屋の前で、僕はそう思った。

ぐうちゃんから外国のちよつとしゃれた封筒で僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたってからだった。珍しい切手がいっぱい貼ってあった。

「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行ってイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になったイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだろう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでいたんだ。きれいだっただよ。厳しい自然に生きている人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思ったよ。地上十階建てのビルぐらいの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もつともつとでっかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱいい

『⑥不思議アタマ』になって世界に出かけていくとおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ち満ちている。誰もが一生懸命生きている。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」

手紙には、ぐうちゃんの⑦力強い文字がぎつしり詰まっていた。

そして、封筒からは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらいあるでっかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにするという氷の惑星の写真だった。

「アイスプラネット」 椎名誠

問一 傍線部①「そんな『ぐうちゃん』とありますが、ここでの「ぐうちゃん」の人物像を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 測量の専門家として、全国で仕事をしている人。

イ おもしろい話をして、家族を喜ばせている人。

ウ 定職につかないで、人の家に住みついている人。

エ 家の六畳間について、「僕」の話を聞いてくれる人。

問二 傍線部②「言い逃れをするぐうちゃんは好きではない」とありますが、「言い逃れ」の具体的な内容を次の空欄にあてはまるように、三十字以

内で答えなさい。

ぐうちゃんが

こと。

問三 空欄Ⅰにあてはまる漢字一字を答えなさい。

問四 傍線部③「いつもよりもっと強烈に雄弁になっている」とありますが、それはなぜですか。その理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母は、「僕」がぐうちゃんみたいになら吹きにならないか心配だから。

イ 母は、「僕」がぐうちゃんのせいで友達にからかわれて頭にきたから。

ウ 母は、「僕」がぐうちゃんのように「ぐうたら」しないか不安だから。

エ 母は、「僕」があまりぐうちゃんの部屋に行かなくなって驚いたから。

問五 傍線部④「ぶっきらぼうに」と同じ意味をもつ言葉を本文中から探し、四字で抜き出しなさい。

問六 傍線部⑤「ほらばっかりだったじゃないか」と思った時の「僕」の様子を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やつといそろうが家から出て行き、ほっとしている。

イ ぐうちゃんのほら話を聞けなくなり、すねている。

ウ またぐうちゃんが旅に出ると聞き、驚いている。

エ ぐうちゃんは何も言わずに家を出たので、不安でいる。

問七 傍線部⑥「不思議アタマ」とはどのようなことですか。次の空欄A～Cにあてはまる語を指定された字数ですべて漢字で答えなさい。

たくさん A 二字 や B 二字 をして、さまざまなことに C 三字以内 をもつこと。

問八 傍線部⑦「力強い文字がぎっしり詰まっていた」とありますが、「僕」へのどんな願いが感じられますか。「世界」という語を用いて四十五字以内で答えなさい。

問九 二重傍線部「海の中の氷は、もつともつとでつかい」から分かる物事の捉え方を「視野」という言葉を使って、自分の具体的な経験を挙げて説明しなさい。

《条件》

- ・ 一行二十五字以上、四行以上で書くこと。
- ・ 文体が統一されていること。
- ・ 文字は、正しく、整えて書くこと。
- ・ 解答用紙の指示にしたがって書くこと。



6月22日(金)		中学2年生 国語
学習内容	漢字テスト(考查範囲), 総合考查 I 対策 (枕草子・見えないだけ・アイスプラネット)	
宿題	【Sirius】 () ~ () ページ 【古典】 () ~ () ページ 【漢字】 書 二段 7&8 読 二段 7&8 考查範囲より 【プリント】 オンライン期間はありません	

ご家庭への通信欄

.....

.....

塾への通信欄

.....

.....